wish

春野　桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｗｉｓｈ

【Ｎコード】
Ｎ０２２４Ｅ

【作者名】
春野　桜

【あらすじ】
少女はある日、悪魔を召喚してしまった。２人は穏やかな日々を過ごしていた。少女が悪魔に願う日までは。この日が、これからの２人の運命を決めたのだった・・・。

1．私の隣にはいつも彼がいた

『あたしに何かあったら助けること』

『あたしが死ぬときはいっしょに死ぬこと』

『あたしを好きになること』

私が悪魔に言った契約の内容だ。

私が悪魔を召喚してしまったのは、私が8歳のときだった。

たまたま、近くに置いてあった『悪魔の召喚方法』という、明らかにうさん臭い本を開いてしまったのが原因だった。

幼い頃特有の好奇心に負けて、つい本に書いてあったことを試してみたら、本当にユーシアと名乗る悪魔を召喚してしまったのだ。

そこで交わした契約。

驚きでなかなか回らない頭から、何とかひねり出した契約だった。

この悪魔との契約が私の人生を狂わせるなんて思ってもいなかった。

契約したての頃は、主人と悪魔という関係も理解できず、ユーシアに悪魔としてでは無く、普通の人間の友達として接していた。

「ユーシア」

と、後ろから呼ぶと、勢いよく振りかえってくる驚いた顔が好きだった。

その顔が見たくて、

「ユーシア、ユーシア」

と、何度も呼んでいた。

実際は年がひと回りも違ったが、対等の友達としてユーシアと過ごしていた。

川で水遊び、広場で二人だけの鬼ごっこ、草原を日が暮れるまで走り回った。

私の家はわりと有名な貴族だった。

そのせいで、周りの人に敬遠されていた私には友達がいなかった。

そんな私に初めてできた友達はユーシアだった。

友達がいることが嬉しくて、毎日のようにユーシアとこもりっきりだった家を出て、外で遊んだ。

何物にも変えることが出来ない、幸せな時間。

それが消え去ってしまったのは私が１０歳のときだった。

あの『悪魔の召喚方法』と書かれた本が置いてあった部屋で、今度は父の日記を見つけたのだ。

そこには、悪魔について様々なことが書かれていた。

ユーシアについて知ることが出来ると思い、夢中になって読んだ。

そして、ユーシアたち悪魔の持つ力や生態を知った。

そのとき、私はあることを思いついた。

嬉しい気持ちでいっぱいの私は、すぐにユーシアに会いに行った。

ユーシアは家の近くで見つけた、二人だけの秘密基地の小屋にいた。

「ユーシア！ユーシアってすごいんだね」

「リスナ？どうしたんだ？いきなり・・・」

「それなら私をこの国のお姫さまにして！それで、ユーシアは私の王子さま！」

私はその頃、読んでいた本の影響でお姫さまや王子さまに憧れていた。

日ごろから、この国のお姫様になれてたら、と思っていた。
ただの子どもの空想。
だけど、本来なら叶うはずもない願いだったのに・・・
「あなたが望むなら」
願いを叶えるだけの力を持つ悪魔が言った。
ただ、窓から差す夕日の逆光のせいでどんな表情をしていたのかは分からなかったけれど。
この日が私達のこれからの運命を決めたのだった。

それから数年たって、そんな願いも忘れてしまった頃。
夜、ベッドで眠っていた私を起こしたのはユーシアだった。
その手は真っ赤に染まっていた。
「リスナ、起きて。ちょっと来てよ」
寝起きだった私は、ユーシアの赤い手が何を意味するのか、ということまで頭が回らなかった。
確かに心のどこかで嫌な予感を感じていたのに。

大人しくユーシアについて行った私が見たのは、

両親だったはずの物。

いや、それは正しい考えではなかったかもしれない。

それが両親だと言える根拠はほとんど無いのだから。

潰された顔面、跡形もないほどに肉片となった身体、千切れた服。

吐き気が込み上げた。

それを飲み込みながら、傍らにいるユーシアを見る。

返り血を全身に浴びたユーシアは、まるで知らない人のようだった。

「あなたがやったの？」

私の声は震えていた。

「もちろん。リスナが望んだんじゃないか」

「こんなこと望んでないわ！」

「だって、リスナはこの国のお姫さまになりたいんだろ？」

「それとどう関係があるのよ！」

「こいつらを殺せば、リスナが権力者になれるじゃないか」

そのとき、私はやっと悪魔について理解した。

主人と悪魔の関係も。

つまり、この悪魔は私が望めば何でも叶えてくれるのだ。

どんなことでも。

それはなんて恐ろしく、甘美（かんび）なことなんだろう。

私はこの悪魔が愚かで哀れで、そして愛しかった。

私を必要としてくれるユーシアが。

誰よりも。そこに転がっている、私を必要としてくれなかった両親よりも。

私の唇はこのとき確かに笑みの形をしていた。

それから、私の転落の人生が始まった。

両親の跡をついで、この国の貴族となった私は権力に酔っていた。

しかし、人間というものは現状に満足しない。

もっともっと、と更に甘い蜜を求めた。

そして、本当にこの国の姫にまでのし上がった。

そのためにさまざまな汚いことを悪魔にやらせた。

このときには殺人なんてもう気にしなくなっていた。

人が死ぬ。

それだけ。

気になるのは、自分がどれだけ楽しく時間を過ごせるのか、ということ。

だから、こんなことになったのだ。

今、私は２０歳だ。

今、私の屋敷は燃えている。

きっと誰かが火をつけたのだろう。

恨まれて当然のことを私はした。

最初は逃げようとしていたが、私のドレスでいっぱいの洋服棚が足に乗っていて、とてもじゃないが動けない。

そして、目の前にはユーシアの顔がある。

死にたくない、と正気を失って喚く私の顔をつかんで、無理やり目を合わせた。

そのおかげでようやく正気に戻れた。

悪夢から覚めたような心地だ。

この数年は本当に悪夢のようなものだった。

昔を思い出してみると、それが良く分かる。

たとえ権力があっても、金があっても、昔のあの頃に比べるとまったく幸せではなかった。

いつもどこかで、不安を感じていた。

しかし、これは悪夢ではなく現実だ。

今も現実として私を苦しめている。

このままなら、私は死ぬだろう。

だけどそれも当然か、と私は思い直す。

これはきっと罰なのだ。

私に対する。

私は酷いことをした。

両親に、他の権力者に、なによりユーシアに。

ユーシアが拒めないことを知りながら酷いことをさせた。

私なんて死んで当然だ。

だけどユーシアには死んで欲しくない。

ユーシアは何も悪くないのだから。

「ユーシア・・・」

ああ、こうして名前を呼ぶのはいつ以来なんだろう。

ずっと、呼んでなかった。

「どうしたの、リスナ？」

「死なないで」

ただ、ユーシアに生きていて欲しくて。

私なんかのせいで、ユーシアが死ぬことに耐えられなくて。

もっと言いたいことがあるのに、言葉が頭の中で渦巻くだけで、口からは出てこない。

かわりに涙が出た。

ユーシアが涙で歪む。

「俺は死ぬよ」

「どうして？」

断言するユーシアに私は震える声で尋ねる。

「だって、リスナが言ったんじゃないか。死ぬときは一緒だって」

契約のことだ。

私はすぐ思い当たった。

契約ではなく本心で言ってくれたら、どんなに嬉しかったか。

「そうだね。契約したね」

「違う！リスナが好きだからだよ！」

どきん、と胸が鳴った。

だけど、それも契約だった。

悪魔だから、契約には従わなければいけないんだろう。

しかし、このままでは本当にユーシアが死んでしまう。

私のせいなのに。

そして、思いついた。
簡単なことだ。
「契約を破棄して」
それがどんなに辛いことだとしても。
「いやだ！俺はリスナが好きなんだ！」
私だってユーシアが好きだ。
きっと、初めて会ったときから。
だけど、ユーシアの『好き』は契約だから。
私が好きになれ、と言った。
「命令よ。契約を破棄して」
私はもう大粒の涙が止まらなかった。
それでも、なんとか毅然（きぜん）と言い切った瞬間、ユーシアの顔は絶望に染まった。
愛してる、アイシテル、あいしてる。
だれよりもユーシアを。

たとえ、ユーシアが私を忘れても。

2．永遠に美しい過去にはもう戻れない（前書き）

１話目はリスナの視点でしたが、今回はユーシアの視点となっています。

2．永遠に美しい過去にはもう戻れない

俺はある日、突然、リスナという少女に召喚された。

俺にとって初めての主人は、まだ８歳だった。

たったの８歳で俺を召喚できたのだから、たいした奴だ、と思った。

しかし、契約内容について考えたり、一緒に過ごしていると、こいつ馬鹿か、と何度も思った。

本当に悪魔とか主人とか分かってるのか？、と何度心の中で尋ねたことか。

だけど、リスナと過ごす日々は穏やかで楽しかった。

「ユーシア」

リスナから名前を呼ばれることに、慣れる前は驚いていたけど、不快ではなかった。

むしろ、名前を呼ばれることが嬉しかった。

何度だって呼ばれたい、と思った。

リスナとは毎日のように一緒に過ごした。

俺は幸せだった。

生まれて初めて。

こんな日々が永遠に続いて欲しい、と悪魔のくせに願っていた。

幸せは長くは続かない。

だけど、そんな俺の願いは叶わなかった。

あれは、リスナが１０歳のとき。

俺は珍しく一人で、家の近くで見つけた二人だけの秘密基地の小屋にいた。

そこに、リスナが息を切らして駆け込んできて、わけの分からないことを言った。

そして、リスナは願った。

主人の願いは叶えなくてはならない。

俺は、叶える、と笑顔で言った。

確かに・・・・・・笑っていたはずだ。

それがたとえ、寂しげで痛みに耐えるような顔だったとしても。

これがきっとあの幸福な日々が終わった瞬間だったのだろう。

ある日の夜、俺はリスナが成長するまで、ずっと考えていた通りにリスナの両親を殺した。

もともと、あいつらはリスナを愛してる、とは言いがたかったし、これがリスナの願いを叶える第一歩だと思った。

リスナが喜ぶと思っていた。

喜んで欲しかった。

しかし、変わり果てた両親の姿を見たリスナは、怯えたような顔で俺を見た。

どうして、そんな顔をするのか分からなかった。

怒るリスナの言葉に答えると、リスナは確かに微笑んだ。

俺はそれを見て嬉しくなった。

もっと見たかった。

俺がリスナを笑顔にしたい、と思った。

だけど、それからリスナはおかしくなった。

権力を得るために平気で人を陥(おとしい)れた。

しかも、全くリスナは幸せそうじゃなかった。

笑わなくなり、俺と目を合わせなくなり、名前も呼んでくれなくなった。

俺はリスナの笑顔を取り戻すために、リスナの言葉に従った。

リスナを愛していた。

しかし、結局、こんなことになってしまった。

燃えている屋敷から逃げ出そうとしたリスナに、洋服棚が落ちてくる。

俺はリスナをかばおうとするが、間に合わなかった。

そして、正気を失って叫ぶリスナの顔を、両手で固定して無理やり目を合わせる。

正気に戻って！昔のあの頃のリスナに戻って！

俺の必死の願いが通じたのか、リスナの正気が戻った。

そして、

「ユーシア・・・」

と、久しぶりに俺の名前を呼んでくれる。

それだけで、嬉しくて涙が出そうになる。

これで、死んでもいい。

だけど、リスナには死んで欲しくない。

リスナには生きていて欲しい。

「契約を破棄して」

そう言われて、それだけで、死ぬかと思った。

必死で、そんなことをしないように説得しても、リスナの決意は変わらない。

もう一度、

「命令よ。契約を破棄して」

と、言われて俺は絶望で、目の前が真っ暗になる。

たとえ、契約を破棄してもこの気持ちは変わらない。

ずっと、好きだった。

リスナが、俺のことをなんとも思っていなくても、俺は、

リスカが好きだ好きだ好きだす・・・

そして、俺の意識は真っ白になった。

ナニモカンジナイ

目の前にいるこの女は誰だろう？

まぁ、どうでもいいや、と思いながら燃え盛る屋敷から外へ出る。

久しぶりの自由な世界。

木の緑が、空の青が、クリアに目に映る。

美しき世界。

だけど、何かが足りない。

何かが・・・・

頭の中を、どこだか思い出せない景色が横切る。

耳に、俺の名前を呼ぶ声が付きまとう。

目の前に、さっきの女の顔がちらつく。

頬を冷たい『何か』が伝った。

3．この祈りが届くように（前書き）

また、リスナの視点に戻ります。

3．この祈りが届くように

契約を破棄したら、ユーシアは一瞬きょとんとした顔で私を見つめ、出て行った。

やはり、忘れてしまった。

それでも、私がユーシアを好きな気持ちは変わらない。

私の気持ちも消えてしまえば良いのに。

「死ぬ前に失恋するなんて」

と、誰もいない部屋で一人呟く。

だんだん意識も薄れてきた。

一酸化炭素を吸いまくってるから当たり前だけど、と心の中で笑う。

どうせなら、死ぬまで一緒にいてくれても良いのに、とユーシアに対して、少しだけ恨めしく思う。

ユーシアが生きていられるようになって、少しは心が楽になったのか、気持ちが明るくなってくる。

最後にあんな醜い私のまま死ななくて良かった。

昔を思い出せて良かった。

と、前向きになる。

これもユーシアのおかげ、と、いつもユーシアに助けてもらっていることに対して、自嘲(じちょう)する。

ユーシア、ユーシア、ユーシア。

愛してる。

ユーシアのことを考えると、止まらなくなる。

想いが溢れてくる。

ユーシアの顔を見ながら死にたかった、と欲がわいてくる。

本格的に頭がボーとしてきた。

考えがまとまらない。

視界に靄(もや)がかかる。

耳が、ドアを開けるような音をわずかに拾う。

「――・ス――」

誰よりもよく知っている声が、聞こえた気がする。

何か暖かいものに触れられたような気がしたところで、意識が途切

れた。

「――ナ」

誰かが叫んでる。

「――ス・！」

だんだん大きくなる声。

「リスナ！！」

私はようやく重たいまぶたを開けた。

目の前にはユーシアの顔。

驚いて体を起こそうとすると、足に痛みが走った。

「――っ！」

声にならない悲鳴が口から漏れる。

「大丈夫？」

ユーシアが労わるように聞いてくる。

「なんでユーシアがいるの！」

「いちゃ悪い？」

「そういう意味じゃなくて！！戻ってきたの！？」

「そうだよ。思い出したんだ」

その言葉にハッとして、口を閉じる。

「好きだよ、リスナ。この気持ちは契約だからじゃない」

私も好き、と言いたかったが声が出なかった。

私にその言葉を言う権利はない。

「どうして助けたの？」

代わりに出たのはそんな言葉だった。

「リスナに生きていて欲しかったからだよ」

ユーシアの真剣な顔に気圧(けお)されて、私にそんな資格はない、という言葉はのど元で消えた。

いいのだろうか、生きていても。

私の心を読んだように、

「いいんだよ。リスナは生きていて」

ユーシアは私の目を見つめながら、言った。

「他の人が許さなくても、俺が許すよ。リスナは俺のために生きて」

許されていいのだろうか。

「失敗したらやり直せば良いじゃん。もう一度、やり直そうよ」

やり直せるのだろうか。

もう一度――――最初から。

「リスナはどうしたい？」

そんなの決まっている。

「ユーシアと生きたい！やり直したいよ！！」

「それならいいじゃん」

もう一度だけ。もう一度だけチャンスを。

今度は間違えない。

ユーシアと一緒に光の道を歩いて進みたい。

「ユーシア、愛してる」

「俺もだよ、リスナ」

もう一度、あの頃の幸せな時間を。

今度は永遠に。

私達は今度こそ二人で幸せになる。

FIN

3．この祈りが届くように（後書き）

この話でｗｉｓｈは終わります。
ここまで読んでくださった方、有難うございました。
感想がいただければ、それだけで泣いて喜びます！

では、また他の作品（書ければ＾＾；；）でお会いできることを祈りつつ・・・・・本当に有難うございました＞（｜　｜）＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0224e/

wish

2011年1月9日00時47分発行